

4月21日

主教教会博士アンセルム

Anselmus

(1033~1109.4.21)

～スコラ学の父～



「アンセルムス」

人名事典などではアンセルムスと表記されている彼はカンタベリー大主教である。

アンセルムは1033年に北イタリアのアオスタで生まれる。両親は貴族で共に敬虔な信仰を持っていた。そのもとで育った彼は16歳になった時、修道院に入る決断をする。しかし一人息子の彼を見て、修道院長は家族の同意がなければ受け入れることはできない、と拒絶する。

そして彼がまだ十代の時に母親が亡くなり、アンセルムはふしだらな生活を送るようになる。だが修道院に入りたいという思いだけは持ち続け、23歳の時ついにその決意を父に打ち明ける。だが、一人息子のアンセルムに莫大な財産を引き継がせたい父は怒って彼の修道院行きに反対する。アンセルムは父と争ったまま、家出をすることとなる。そして1059年にはノルマンディにあるベック修道院に入り63年には副院長に任命される。その学びの中で、アンセルムは信仰と理性の統一を目指す独自の思索を示していく。

さて、当時西方教会では国王と教皇との主権争いである主教の叙任権問題が起こっていた。その影響もあり、国王はカンタベリー大主教を空位のままで置いていた。その中、イングランド王ウィリアム2世は自分の病気を機に、カンタベリー大

主教を任命することを決意、アンセルムに白羽の矢を立てる。それは1093年のことであるが、国王が教会の人事、それも主教の叙任権を持つことに反対の立場をとっていたアンセルムは、パリウム(带状の肩覆い)を国王ではなくローマにいる教皇から受けたいと希望する。国王はそれを拒絶したために、叙任権問題は大きくなっていく。

アンセルムは二年後にカンタベリーでパリウムを受領して大主教となり、一旦は落ち着いたように見えたが不和は収まらず、その二年後に追放されてしまう。王の死後、カンタベリーに戻るが、次の王ヘンリー1世とも叙任権を巡って再び対立し、1106年まで追放される。

彼が政教条約によって和解しイングランドに戻るのには、病死する二年前だった。(Y)

<特禱>

全能の神よ、あなたは主のしもべ、主教教会博士アンセルムの教えによって公会を照らして下さいました。どうか天の恵みをもって公会をますます豊かにし、忠実な証びとを起して下さい。その生活と教えに倣い、わたしたちがすべての人に救いの真理を宣べ伝えることができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン